

究極の終活

安八町 得浄寺 田中 恵順

◆今回は、最も大切な終活、究極の終活とは何か、ということについてお話したいと思います。ここで終活というのは、勿論、学生さんたちの就職活動のことではありません。人生の晩年、終末期を迎えて、「死」を意識するようになり、その準備をする活動のことです。

◆一昨年(2019年)の12月から、『中日新聞』に、「メメント・モリ」と題した特集記事が、何回にもわたって掲載され、現在も続いています。メメント・モリというのは、ラテン語で、「死を忘れるな」という意味だそうです。

◆超高齢社会が進み、年間130万人以上の日本人が亡くなるといういわゆる「多死社会」を迎えた現在、まことにタイムリーな特集記事です。読者の反響も大きいようで、私も興味深く読み続けています。

◆重い病気の告知を受けたときに、延命処置を行うかどうか、とか、病院で最期を迎えるのか、自宅へ帰るのか、とか、生きているうちにやっておくべきことは何か、とか、遺言を書いておくべきかどうか、とか、葬儀をどのように行うか、とか、遺骨をどこへ納めるか、とか、墓を相続してくれる者があるのかどうか、・・・などなど、・・・

私たち中高年の者は勿論のこと、その家族にとっても、大変悩ましい問題です。勿論、これらの問題は、よく考えて準備しておくべき「終活」です。しかし、いま私が申し上げたいことは、それらの問題よりも、もっと大切な、「究極の終活」とは何かという問題です。

◆究極の終活とは、まやかしものでない、ほんものの宗教と出会い、確かな善知識の教えを聞き続ける中で、「いのちの真実」に目覚め、「生死の本当の意味」を知ることによって、穏やかな臨終を迎えることができる、そのような「心の準備」を進めることだと思います。

◆私自身のことを申し上げるならば、それは親鸞聖人と、その伝統を正しく引き継ぐ先生方の教えを聞き続けてゆくことです。聞法を続ける中で、私にも少しずつ光が見えてきたような気がします。この私の命は、阿弥陀さまの永遠の寿(いのち)の一分身であって、私の限りある命が終わるとき、お浄土の阿弥陀さまのもとへ迎えられるのだと、そう信じて、多くの悩み事を抱えながらも、念仏を抛り所に歩んでゆけばよいのだと、そう思えるようになってきました。